

学校長 角 本 順 次

本校創設以来4年に行われて続けられてきた「表現化に視点をあてた教育課程の編成」のとり組みは昨年度をとりて終了し、このころが新しい主題のもとで研究を始めることとなつた。過去の主題による研究の成果は、いろいろの研究会で報告され、印刷もされた。いろいろ知られるところとなり、高い評価を得て来た。よつてこの努力は十分に報われたといふより。この方に対して、諸先輩に敬意を表したいと思う。また昨年度には高等部が最初の卒業生を世に出し、かくして、本校は完全な形態をととのえて、運営も軌道に乗つたといふ段階に立ち至つたのである。当時の教育職員に、あわせて謝意を表する次第である。

年度が変わり、本校では校長を含めて相当規模の人事異動があり、このため、新しい顔ぶれも加えて、新しい研究にとり組むことになつた。このさい、これまでの研究の成果をうけついで一定の継続性を保つことと、他方で新しい視点と方法を加えて魅力ある研究実践とすることとを心がけた。今年度はその一年目にあつてゐるが、当初から意固して主題の決定自体に討論の時間をかけないため、年度内に正式の研究発表会を開くに至らず、ここに「試行的」な研究・実践の結果を報告して批判を仰ぐこととした。従つて、現段階のものほ何處かの校内討論会、校内研究授業を経てものであるといふ。理論的にも實際的にも未熟なものである。ここで得られたご意見を参考にし、練り直しの上、本年5月に、大会を開いていろいろ世に問う予定である。そして今年度を含め、3年間あるいはそれ以上の期間が、この主題のもとで研究にあてられることにならう。

このように、研究は未だ緒にないばかりといひながら、今後

を見過してその課題とすべき事がらとすべきにいくつか考えられる。
前号研究紀要の「表現化に視点をあてた研究のまとめ」において
は、「障害者・社会との連携の問題」が課題として挙げられている
が、この指摘は今回の場合と同じくあてはまる。一般に、学校
教育は家庭教育とうまくかみ合ってこそその効果が期待されるも
のであるが、障害児の場合、家庭が学校教育の成否を左右するも
とのいわれられている。さらに、障害者の社会参加を可能にするもの
は、その能力の程度にかかっているというより、社会の側面を
けずる姿勢にかかっているというべきであり、先般、障害者と
社会との橋渡しとすべき養護学校の責任は大きいものがある。今
回、新しい研究実践に力がかかるにあたり、学校内で努力を傾
ける人はもちろんであるが、また、外に向かって働きかけることも
忘れぬようにしたい。

われわれのとり組みに対する、周囲の励ましと、厳しい指導と
願って、あいさつに代えたいと思ふ。

(昭和58年2月8日)